

第六章 幕府崩壊

鈴木市郎右衛門邸で数日休養した浅野作造は、軽傷で本復した。包帯をはずした日の朝、市郎右衛門の案内で江戸湾防備施設の一つである〈吾妻村番所〉を見学した。海辺の老樹松林を切り開き、四方を簡素な土塀で囲んだ一角に出番所と兵器小屋が建てられており、普段は近隣の名主らが交代で詰めている。

内房の海防拠点は富津陣屋および竹ヶ岡陣屋で、砲架が数門設置されている。元は会津藩の管轄下にあったが、先年前橋藩と交代したという。湾内に侵入した異国船が富津岬を越えた場合、陣屋以北を守るのは自分らの番所なのだとし市郎右衛門は胸を張った。

波打ち際に面した土塀に立って海を眺めていた作造は、振り返って施設の内側を見回した。

「ここに大砲はないのですか」

「ございません。吾妻村番所は臨時水夫と役船の拠点で、非常時には近隣の村から人足と漁船を徴集します。我々の使命は海上の偵察、兵器と食料の運搬、炊き出し、回状の伝達などですが、いざとなれば小舟を駆って異国船に斬り込む覚悟でございます。ここでは組頭のことを会津風に地首と呼ぶのですよ」と誇らしげに語るのだった。

江戸湾防備の末端的施設に過ぎないが、ここを任されている市郎右衛門のような名主層の幕府に寄せるけなげな忠誠心を垣間見て、作造は胸打たれる思いがした。存外、国の危急を救うのは、これらの民なのではないかと感じたりもする。

「ところで市郎右衛門殿、今日一日、馬をお借りしたいのだが」

「うちの馬は佐倉牧で買い求めたものですから、農耕馬とはいえっても駿馬でございます

「よ

そう太鼓判を押した。

木更津南町の酒屋に馬の蹄の音が聞こえてきたので、主人が往来へ顔を出すと、馬上の

作造が笑顔で見下ろしていた。

「ああ、お侍様、先日は誠にありがとうございます。おかげさまで大口の商いをさせていただきました」と大福帳を抱えて深く頭を下げた。

「ご主人、きせはおるか。これから横田村まで出向くゆえ、先夜の礼をかねて遠乗りに連れ出したい」

「それはそれは」と何度も頭を下げて、「きせや、きせ」店内に声をかけた。

きせが座敷箒を持って出てくると、あつと両足をすくませて、店先でいなく馬体を見上げた。

さすがに襷掛け半纏姿で馬に乗せるのもどうかと、主人の女房がきせの頭に手拭いをかぶせ、手甲、脚絆まで着けさせて、まるで旅にでも出るような装いとなる。

あぶみに足をかけたきせは、女房に尻を押されて馬上に這い上がった。馬の背には、きせのために厚い敷物がかけられている。

「拙者の腰につかまっておれ。振り飛ばされるなよ」

背後のきせにそう声をかけて手綱を操ると、作造は馬腹を軽く蹴った。往来を行く人々が珍しそうに眺めており、きせはなんだか照れ臭かった。

かっぱかっぱと速足で通りを抜け、田地が広がる辺りまで来ると、「はッ」と一声、作造は一気に馬を走らせた。まるで一陣の風のごとく、二人を乗せた駿馬は小櫃川と平行して走った。

「きせよ、馬に乗るのは初めてか」

「へえ、初めてです」

そう大きな声で応えたが、馬が鬣をなびかせて風を切る音と、土を蹴立てる蹄の音の方が圧倒的にけたたましい。

「わしは武芸十八般の中でも特に馬術が好きなんじゃ」

と語る作造の声もよくは聞き取れない。

必至に腰にしがみつきなながらも、砂塵を巻き上げて疾走する馬の背は意外にも心地よく

、勢いよく過ぎていく沿道の眺めも迫力があつた。いつも酒屋の薄暗い店内で雑用をしているきせにとって、天狗にでもさらわれたような新鮮な気分だった。

良く晴れた空の下、豊かな水量をたたえた小櫃川が波光をたたえて流れている。遡上する川舟を追い抜くと、あつという間に後方の景色に吸い込まれてしまった。

「きせ、楽しいか」

作造は大きな地声をさらに大きくして、ちらと後ろへ顔を向けた。

「すごく楽しいです」

腰にしがみついたまま大きな声で応えると、きせはますます気分が高揚した。「はッ」と作造が馬をあおるたびに、きゃーきゃー悲鳴をあげながらも、なんだか愉快で笑いが止まらない。

横田村河内屋の前で手綱を強く引くと、馬がいなないて前足を上げた。

鞍から飛び降りた作造は、ひよいときせを抱き下ろした。

「万里小路局の使者、浅野作造頼房にござる。川名里鹿殿にお目通り願いたい」

また様の使いが来たと聞いて、里鹿は驚くと同時に、いつになく身の引き締まる思いがした。鏡台の前で髪と身なりを整えて、一度大きく深呼吸してから作造を客間に迎え入れる。

平伏する作造の横で、きせもかしこまって顔を伏せた。

「御遠路はるばる御大義にござります。して、いかなる御用向きにござりましょう」

里鹿のことばの抑揚が、しぜん和大奥時代の優雅な諧調になっている。

作造は膝行し、「これを」と一通の奉書を差し出した。

それに目を通した里鹿は、まずはなつかしい都山の筆跡を見て口元をほころばせ、また様が請西藩領で隠棲する由、ときどき閑居を訪って機嫌を奉伺してほしい云々、という内容に触れた。

「奥女中のはしたに過ぎなかったわたくしのことを、かほどまでにお目にかけてくださる

のか」里鹿は思わず涙ぐんだ。

「ところで浅野殿。お連れの可愛らしい娘さんは、ご息女にございますか」
との問いかけに、作造はすっとんきょうな声をあげた。

「いやいやとんでもござらぬ。拙者は独り身、この娘は身共の命を救ってくれた酒屋のきせ女と申します」と、あの晩の出来事を身振り手振りで語って聞かせた。

里鹿はひどく感心し、二人のためにお茶をたて、牡丹をかたどった甘い練り切りでもてなし、きせには自分の花簪と、摘み細工の髪飾り、ぽっくりなどをお土産に持たせた。

帰り際、里鹿はきせの手をとって、

「うちは男の子ばかりだから、きせちゃんとお近づきになれて嬉しいわ」と別れを惜しんだ。

木更津へ戻る馬上で作造が、

「今日は楽しかったか」と振り向いてたずねると、

「へえ。夢のようでした」

里鹿が前髪に結んでくれた摘み細工に手を当てて、きせは照れ臭そうに微笑んだ。

再びまて様にお目もじがかなうのだと思うと、里鹿は居ても立っても居られず、店先で女中をからかっている夫の正純の元へ行ってこの件について語り、

「長楽寺への往復に、黒漆塗りの駕籠を購入してもよろしいでしょうか」

と伺いを立てた。

正純は、素っ気なく答える。

「買えばいいですよ、いちいちわたしに断らずとも」

この一言で里鹿はたちまち気分阻喪して、「なんですか、その言い方は」と声に棘が生える。

正純は鼻の先で笑った。

「じゃあ、わたしがダメと言ったら、あなたはそれに従うんですか。そんな気、さらさら

ないでしょう。だから断らなくていいと言ってるんですよ」扇子の要で首の後ろを掻きながら、ふらりと外へ出て行ってしまった。

里鹿は下唇を震わせながら、

「ええ。初めから従う気なんてありませんよ」

自分にしか聞こえないほどの声でつぶやいた。

いよいよ、驚天動地の事態が訪れようとしている。

西上総の富裕層が神徳元年と呼んだ慶応三年の十月十四日、東照神君の再来とも呼ばれる十五代将軍徳川慶喜が、へ大政奉還の上表を朝廷に提出した。すなわち、源頼朝以来六百七十年余りにわたって続く武家政治、江戸開闢以来二百六十年余りつづいた徳川幕府の終わりである。将軍自ら国の統治権を天皇に返還した。

日本はもともと天皇が治めていた国であり、それを武家政権が長らく専横していたというのが尊王の志士らの言い分であった。わけでも癸丑以来、朝廷の許可を得ず外国と通商条約を交わすなど許されざる大罪であり、その失政を悔いるなら速やかに政権を天子様にお返しせよと執拗に迫った。この主張を藩を挙げて唱えているのが長州と薩摩であり、同盟結成以来攻勢を強め、パリ万国博覧会でも幕府をやりこめている。万世一系の皇国は万邦無比であり、徳川家など一臣下にすぎぬと日を追って敵意を剥き出しにするこの勢力に対し、現役の将軍である徳川慶喜が、

「そこまで申すなら、政権をお返ししましょう」

と無条件に申し出たのが、大政奉還なのである。

この事態にもっとも驚いたのは、当の朝廷だった。政権返上を迫っても絶対に返してくることがないと高をくくっていたからである。武家の統帥たる徳川将軍が、自ら政権を手放すなど誰が想像できただろう。実はこの時、幼帝を擁した朝廷内で、倒幕の密計がすすめられていた。薩藩志士と公卿らの策謀で、政権を返上しない慶喜を討伐せよという内容の偽勅が作成されていたのである。これが西国雄藩に降下されれば、即刻倒幕戦争が勃発

するはずであった。

この密計を、慶喜は事前に察知していたらしい。勅書が降下されたまさにその日、大政奉還がなされたのである。討幕派は肩透かしをくらった格好となった。慶喜の政治的手腕を評して家康の再来と言わしめた所以はこれである。しかも朝廷は、鎌倉幕府成立以来、六百七十年余り政治から遠ざかっていたのだから、いきなり国の統治権を差し戻されても、どうすればいいかわからない。

慶喜のねらいは、そこにあった。

世上は大政奉還という事態に困惑していたが、慶喜の頭の中で次に打つ一手は決まっていたし、一部の開明的な幕臣もその後の展開を予測していた。

すなわち、政権をもてあました朝廷は困り果てたあげく、再び庶政を將軍に委任してくるだろう。その機を逃さず、幕府側が望む新国家構想を実現すればいい。

一言で言ってしまうえば、幕政に欧米の議会政治を導入し、諸大名を上院、人選された藩士を下院とする国会を開設し、徳川將軍が首相となる。首相は上院の議長となり、下院の解散権を持つ。各藩の軍事力は国軍として統一し、天皇は神仏の長として、これまで通り伝統的な権威を認める。この構想を練ったのは將軍側近の西周で、海外留学の経験者であり、特にフランス語に長けていた。もし西の構想が現実のものとなれば、弱体化した幕藩体制を速やかに一新して、強固な権力を掌握した〈徳川大君制国家〉が誕生するだろう。この展開を待ち望んでいたのが、中央集権郡県制度を画策している幕閣の小栗忠順と、福田八郎右衛門ら幕府陸軍青年将校、木更津で佐幕の旗幟を明らかにしている義勇隊なのである。

が、結論から述べてしまうと、新生徳川構想は実現しなかった。

ひとたび朝廷に奉還された政権を、なにがなんでも手放さぬと腹をくくった志士たちがいたのだ。その代表格が薩摩の西郷隆盛、大久保利通、公卿の岩倉具視である。彼らは十二月九日、果敢にも〈王政復古の大号令〉を発し、日本が天皇制国家に移行したことを内外に示した。

そればかりではない。

政権を平和裏に奉還した徳川慶喜に対して、「辞官納地」を命じたのである。徳川將軍を三百諸侯の頂点から引きずり下ろし、四百万石の全領地を没収するという処置である。これにより朝廷は、徳川御家門、御親藩、譜代大名、旗本八万騎を完全に敵に回したことになる。

西日本各地に大神宮の御札が降りそそぎ、民衆が「ええじゃないか」を連呼して踊りだしたのもこの時期である。御祓の御札が風になびいてへんぽんと降り来る様は白鷺が飛び回るように見えたという。その紙吹雪の中を、男は女装し、女は肩脱ぎして男装し、老若男女が入り乱れ、

エエジャナイカ

エエジャナイカ

何かに取り憑かれたように、歌い踊ってねり歩く。この不思議な乱痴気騒ぎは年末まで続いた。どこの誰によって御札がまかれたのか、誰の扇動によって民衆が熱狂したのか、くわしいことは未だによくわかっていない。

朝廷と薩摩藩の攻勢に、慶喜もただちに反撃する。大阪城に外国公使を招き、このたびの政変は「一部の奸謀」によるもので、日本を代表する政府は依然幕府であるとの声明を発表した。外交権はまだ慶喜の掌中にあつたのだ。世論も、辞官納地は極論に過ぎると徳川同情論に傾き、それを受けて公卿らがたちまち弱腰になり始める。政治的揺り戻しが起こりつつあり、討幕派は急速に孤立し始めた。

この劣勢を挽回するため、薩摩は暴挙に打って出る。

將軍不在の江戸府内で、放火、掠奪、暴行などを繰り返し、幕府を挑発する行動に出たのである。彼らとしては、政権を返上した前將軍と今さら政治的駆け引きなどをしていない場合ではなく、武力革命によって旧態依然たる武家社会を打ち倒し、封建制度の価値観を破壊せしめ、その上に天皇を頂点とする近代国家を建設しなければならないのであった。

が、外野で各国公使が事態を注視している状況でもあり、こちらから戦争をしかければ国際的な非難を受ける危惧がある。よって幕府の方から戦端を開かせたい、との意向を受けた江戸薩摩藩邸在勤の藩士らは、関東草莽の志士らを密かに手なづけ、彼らを扇動して擾乱活動を展開する。標的は江戸の警備部隊、幕府御用商人、唐物商法をする貿易商などであった。

関東志士の多くは、海外貿易によって凋落した養蚕農家の出身であり、幕府の失政を憎むこと並々ならぬものがある。具体的な怒りに端を発しているから、いきおい擾乱活動も過激の度を増していった。ここに単なる無法者も便乗し、薩摩藩御用を騙って一般商家からも金品略奪、抵抗すれば刃傷沙汰におよぶ御用盗が横行する。強姦、辻斬りまでも頻発し、江戸の治安は完全に崩壊した。

市中の警備にあたる（新徴組）の屯所へ、佐幕急進派が集まったのは事態の深刻さを憂いてのことである。すでに新徴組の隊士も巡邏中に襲われていたが、慶喜や幕閣は上方にあつて不在、江戸城の留守政府は慎重な態度を取らざるを得ず、今のところ薩摩藩の暴挙を静観していた。

新徴組を預かる庄内藩を代表して木崎定之丞、沖田総司の義兄で組頭の沖田林太郎、会津藩中屋敷から細川外記、幕府陸軍所から斎藤閑斎、義勇隊から常盤之助、斎藤常次郎らが集まった。

沖田林太郎がきっぱりと、

「浪士どもは薩摩の三田藩邸から出て、またそこへ帰っていきます。一味を扇動しているのは薩摩とみて間違いありません」と皆に報告した。

また、それらの徒党とは別に、倒幕の気運に乗じた草莽の志士らが関東各地で拳兵騒ぎを起こしてもいる。今のところ局地的な騒動は事態の拡大をみる前に鎮圧されているが、敗走兵が逃げ込む先も薩摩藩邸なのであった。

「あそこを叩かんと、この擾乱はおさまらぬ」

車座になった面々を見回しながら、木崎が強い調子で言った。

文久三年まで公武融和路線で薩摩と協調関係にあった会津藩の細川外記は、無念やるかたない様子で顔をしかめている。薩摩と会津が足並みを揃えていた時期もあったなど今は冗談のような話であり、ここ数年の間に、いかに政局が複雑に変動したかを物語っている。

細川外記は下唇を震わせながら、

「もはや閣老の指示を待たず、薩賊の巢窟へ斬り込み、一剣をもって天下を正そうではないか」膝に置かれた拳を強く握りしめた。

斎藤閑齋はそれを聞いて深く首肯しつつも、

「なれど、今は慎重の上にも慎重を期さぬと、どんな伏兵や謀略が潜んでおるやもわからぬ」と自重を勧めた。

「これは異なことを」

外記は一膝乗り出し、声を荒げた。

「兵馬最強たる徳川幕府が、おめおめと乱臣賊子に挑発されたままでおれば、外様はおるか、外国にも弱腰とそしりを受けましょう。ここは有無も言わず藩邸を焼き討ちし、薩摩奸党の非を鳴らすべきではありませんか」

このような議論の場に、常盤之助は江戸滞在以来、何度も立ち会ってきた。いずれも国を憂う者たちの至誠から出る意見であり、身につまされる思いで傾聴している。しかし、いつだってどうすればいいかの判断を自分ではつけかね、議論に加わるだけの見識もなく、それがたまたまなく歯がゆかった。

声高な論争に交じって、なにやら物音が聞こえた。常盤之助は耳をそばだてた。

「幕府の犬めが！」

という叫び声が屋外から聞こえた次の瞬間、

バンッ、ババンッ、バン、バン！ 乱射された銃声が鋭く響いた。板戸の破片や漆喰が細かく飛び散り、そのうちの一発が屯所の使用人の命を奪った。常盤之助らは刀を引き寄せて戸外へ飛び出した。まだ硝煙が立ち込めており、走り去る浪士たちの後ろ姿が見えて

いる。常盤之助は袴の股立ちを取りながら一散に駆けた。

数町走ったところで突如、路地から出て来た浪士が一人、大上段から拝み打ちに斬りつけてきた。常盤之助は身をひるがえして抜刀し、相手の小手を抜き打ちにする。刀の柄を握ったままの両手首が、まるで大根でも切ったように切断された。折りくずれた浪士の首に刀を振り下ろすと、ざっと鮮血が地べたを濡らし、頭が毬のように転がり落ちた。常盤之助は両眼を見開き、日本刀のあまりの切れ味に茫然とした。

「おみごと」

と背後で声をかけたのは抜き身をひっさげた細川外記で、追いついた常次郎も「やりましたね、大手柄だ」飛び上がらんばかりに喜んでいる。

常盤之助は胸が破れそうなほど肩で大きく息をしていたが、やがて名状しがたい感情が高ぶり出すと、油脂のしたたる刀を手にしたまま、高らかに声を上げて笑い出した。

浪士らの暴挙は、ついには江戸城西之丸の放火にまで及び、留守政府首席稲葉正邦は薩摩藩邸討ち入りを決定する。

慶応三年十月二十五日未明、江戸市中取締りを任じられている出羽庄内藩と新徴組が薩邸を包囲し、まずは庄内藩士安倍藤蔵が単身乗り込んで賊徒引渡しを要求した。

「貴邸に潜伏している不逞の輩をお引き渡し願いたい」

これに対し薩邸留守居役の篠崎彦十郎が、

「ここで幾人かん浪士を匿うちよるんな事実じゃ。じゃっどん、そいがあたんゆ不逞ん輩であっかどうかはわかりもはん。よっせえ、引渡しん要求には従えもはん」

そう回答すると、安倍はしごくあっさり、

「ならば手切れにござる」と言い捨てて、交渉は決裂した。

安倍を見送りに邸外へ出た篠崎はいきなり庄内藩兵の槍で突き殺され、これを合図に討ち入りが決行された。薩摩側の抵抗も激しく、戦闘は三時間余り続いたが、庄内側の撃ち込んだ砲弾が邸内の焰硝蔵を爆発炎上させ、藩邸はついに陥落する。薩摩側の戦死者六十

四人、捕縛された浪士は百人を超えた。討伐側の犠牲者は十一人。

この戦闘の様子を高台から見ていた細川外記は、

「いよいよ奸藩討伐の戦いが始まりましたな」

と、眼光炯々たるものがある。

常盤之助も薩邸から上る黒煙を眺めながら、

「薩摩芋がいいあんばいに焼けていますね」と、ほがらかに笑った。

慶応三年大晦日、高窓から差し込む薄い日光の下で、三千太郎が書物に目を落としていく。格子のはまった四畳ほどの独居房には畳が一枚敷かれているきりで、あとは黒々と古びた板張りであった。

三千太郎が手にしている『海外新話』は仮名綴り本で全五冊、清朝が阿片戦争を経て不平等条約を締結するまでの経緯が簡明に記されている。海外の地図、アジアにおける英国の侵略範囲まで図示されていた。木版絵画が多数挿入されているのが印象的で、洋式軍艦や英兵の軍装なども精緻に描かれており、眺めているだけでも面白い。

牢屋敷が建つ四方ヶ原は、大昔は墓場であったという。「芝生の原」がなまって「しほらがはら」と呼ばれたとも、かつて僧房が四つ建っていた故「しほう」という地名になったとも伝わる。一見して物寂しい平坦な場所で、現在の木更津高校の辺りがその敷地であったらしい。

獄舎を取り囲む高い土塀の前で背伸びをすると、遠くに太田山が見える。獄室の扉は施錠されており、自由に出入りできたから、三千太郎は毎朝中庭で木剣を振った。司獄も牢番も地元の者で、島屋門を怒らせたら一大事と心得ているから、誰も粗雑な扱いをしてくれなかったし、むしろ客人をもてなすように気を使ってくれてもいる。豊など毎日外出して、近所の湯屋へ通っていた。

「髪を短くして良かったことは」と顔を火照らせた豊が手拭いを提げて三千太郎の獄室へ入って来た。「毎日髪を洗えることだね」

この時代の女性は月に二三度しか洗髪しない。豊は指で髪をすくたびに、もういちど鬘を結うぐらいなら坊主になったほうがましだと思ふのだった。

楓江先生も、毎日のように通い徳利を片手にここへ遊びにやって来る。

「おお、乙女は風呂上りか。どうじゃ、一杯やらぬか」と三千太郎の獄室へずかずか入って畳に腰を下ろし、獄卒に湯呑を持ってきてくれと声をかける。

豊は手拭いで顔をあおぎながら、

「先生、今夜は大晦日だよ。こんなところで飲んでていいの？ 横峰の自宅へ帰らなくていいの？」と尋ねた。このところ楓江が家族の元へ戻らず、南町の旅館「泉屋」の離れで寝起きしているのを気にかけているのである。

楓江は「女子と小人とは養い難し」などと論語の一節を口ごもりながら、あきらかにその話題に触れたくないそぶりをみせた。海外新話の一冊をおもむろに取り上げて、自信ありげに三千太郎の顔をのぞいてみせる。

「どうじゃ、わしの本は」

「いや、先生の書いたものだから正直期待してなかったんだが、実に良かった」

「おぬしならわかると思うておった。だいたいおぬしは、こんなところに入っておるような若者ではないのだ」

「確かに、おれに上牢はもつたいない。ほとんどの囚人が北舎の雑居房に入れられて、一汁一菜の飯しか食わせてもらってないんだからな」

「わしが申しておるのは牢舎の格のことではない。いやしかし、なんと申すか、おぬしのそういう性格が人徳とも思えるのだ」

などと言いながら徳利の栓を抜いた。

上牢は武家や富裕層の軽犯罪者が収容されるところで、金さえ払えば朝晩の食事も近くの煮売屋から取り寄せることができる。この日も暮六つ前には夕飯が届いた。年越しの膳は、白飯、里芋と大根の煮しめ、せいごの煮魚だった。

「平さん、ご飯だよ」豊が隣の獄室へ声をかけたが、返事がない。

「やれやれ」と呼びに立つと、入獄以来、いつものようにふて寝している平右衛門の姿が格子越しに見えている。ここの扉も開けっ放しである。

「平さん、起きてよ、ご飯だよ」

揺り起こされた平右衛門の頬は無精髭におおわれ、鬚がそそけ立ち、着衣もよれよれで、いかにも囚人の体であった。しんどそうに起き上がると、垢じみた袖に片手を突っ込んで二の腕をぼりぼり掻きながら、三千太郎の房へ入って来た。

箱膳に置かれたせいごの煮魚を見るなりへっへと笑って、

「牢屋で出世魚を食うことになるとはねえ」と顎髭を撫でつけながら言った。

湯呑についだ酒で乾杯する頃、暮色も深まりかけている。西寄りの風が肌寒いので、獄卒が気を使って火鉢に炭を足し、五徳に鉄瓶をかけて湯をわかしてくれた。豊は途中からお湯割りにして飲んだ。

ここ数日、話題はどうしても大政奉還のことになる。しかも楓江の得た直近の情報によれば、三田の薩摩藩邸が焼き討ちされたという。

「これからどうなることやら」

ちびりと湯呑を傾けた楓江がつぶやくと、出世魚のおかしらをつついていた平右衛門の箸が止まった。

「幕府なんぞ、このままなくなっちゃまっていいかもしれんな……」

と、それが思いつめた末の一言であろうことは、声の調子からうかがえる。しかし率先して義勇隊の活動に挺身してきた平右衛門の口から、まさか聞かれよう言葉とも思えなかった。

「どうしたんだい、平さんらしくもない」豊が眉を曇らせた。

「いやさ、そもそもおれたち、あんでこんなところにいるんだって話しよ。あにが悲しくてこんなところで年越ししてんだ。おれたちや木更津の治安を守るため、大奥老女の荷物を野盗から守るため、体を張って戦ったんだぜ。しかもその野盗にしたって、考えてみりゃあお上の失政が生み出した無職渡世と田捨て百姓じゃねえか。八州様だの幕吏なんぞ、ど

いつもこいつも馬鹿ばかりよ。豊ちゃんは腹立たねえのかい？ 女を平気で牢にぶち込むような奴らだぜ」

「それよ」と豊は箸先を平右衛門に向けた。

「もっとひどい目にあうと思ったら、意外と快適で驚いた」

「いや、そういうこと言ってんじゃないかってよう。おれは幕府の体たらくを嘆えてるんだ。なあ、先生はどう思うよ」

「我が国は今、外患内賊の危機に瀕しておる」と、飲む手を止めて容儀をただした。楓江が真面目な顔つきをすると不思議な威厳があり、皆しばし箸を止めた。

「確かに、平右衛門の申す通り、幕藩体制の劣化は明らかであり、先祖の武功にあぐらをかいて俸禄を貪っておるだけの役人も少なくない。なれど、いま重要なことは、幕府こそが最大の海軍力を保持しておるといことなのだ。西洋夷は虎視眈々とアジアの征服を企んでおる。阿片戦争後の清朝を見よ、火を見るより明らかではないか。この外患に抗するため、今は征夷大將軍の元に諸侯が結束し、国威を発揚し、外国に侵略の口実を与えてはならぬ。その上で幕政の改むるところを改めて、宸襟を安んじ奉るべきではないかと考える」

「つまり……」と豊が首を傾げた。「どゆこと？」

楓江は湯呑の酒を一口すすると、目尻を下げて平素の酔っぱらいの顔に戻った。

「内輪の争いなぞしている場合ではない、ということよ」

灯ともし頃となり、牢内の夜回りが拍子木を打ちながら長廊下を渡ってゆく。

三千太郎は鉄瓶を傾けて酒に湯を注いだ。獄舎の板張りが冷たさを増すところである。

「海外新話を読んだ後だと、ふーこー先生の言っていることがよくわかる」

「であろう」と少しばかり声の調子が居丈高になる。

「だけだよ」と、平右衛門はなおも不服そうであった。

「先生が木更津に来たのは、その書物の出版をとがめられてのことなんじゃろう。なんでそんな幕府を、先生は見限らねえんだい」

「版木が焼かれたのは、嘉永二年のことであつたか……」楓江は酔いどれた目をしばたかせた。

「幕府はわしの書を発禁処分としたが、当時の幕閣のお歴々は、さぞやあの書を熟読したことであろう。今や幕府は留学生を海外へ送り出し、洋式製鉄、造船技術、最先端の軍事知識の吸収に躍起となつておる。これは幕府が鎖国の弊を悟り、国力の貧弱を思い知り、列強の領土的野心の恐ろしさを自覚したからに他ならず、拙著がその一助となつたのは疑うべくもない。今や旗本八万騎は元龜天正以来の古式ゆかしき軍学を脱し、近代軍制への移行を遂げようとしておる。いかに危殆に瀕しておろうとも、兵馬最強は徳川であり、よつてこの国を外圧から守れるのも徳川を置いて他にない。君臣の義を正すため大政奉還はやむなしとしても、これに便乗して薩摩がしゃしゃり出てくるなぞは大逆無道と言わざるを得ぬ」と語気を強めるにつれて顔の赤みがいっそう増すのであつた。

平右衛門は四つ目綴じの海外新話をめくりながら、挿絵をまじまじと眺めた。

「毎日ふて寝してても始まらねえから、ここに居る間、いっちょ外国のことも学んでみっかなあ」

「その意気やよし」と楓江は膝を打ち、「乙女よ、そなたも学ぶがよろし。これからのれでいはすたでいすべきぞ」と豊にも海外新話の一冊を渡した。

「まあね、ここに居たって賦役があるわけでもなし、退屈しのぎに学問するのも悪くないかな」

「学べば則ち固ならずよ」

などと語らいながら酒を酌み交わしていると、獄卒が手燭を灯してやってきて、面会者の来訪を告げた。

獄舎の扉を開けて真っ先に入って来たのは茂三郎で、後ろに角樽を提げた縫之進と幸左衛門の姿もみえる。総三郎とクニは大きな風呂敷包みを抱えていた。

コンモが清々した様子で「おかげさまです払いも終わつたし、今年はここで年越させてもらうぜ」と三千太郎と豊の間に割って入った。

すでに島屋の名義で牢役人と北舎の雑居房に酒樽が振舞われていたから、司獄官がひどく恐縮して、「ここではなんですから、われらの詰所でおくつろぎくださいませ」と平に伏すように申し出たが、幸左衛門は丁重に断った。

「年越しそばを食べに来ましたんで、すまないが炊き場を使わせてもらいますよ」

風呂敷の中身は生そばと鰹節、濃口醤油、味醂、砂糖などである。

「さあ腕を振るいますか」幸左衛門とクニが調理場へ立った。

「しょーじゅがね」とつぶやきながら縫之進が刻み煙草をつまんで丸める。

「じぶんのせいでミチタがお縄になったと嘆いてるよ」

「あいつのせいじゃない。鉄砲を撃ったのはおれだからな」

「あれでなかなか繊細なところがあるからさ。今夜もここへ来たがってたんだが、さすがに、大晦日はね」

「初詣に行けるのは、いったいいつになるやら」と苦笑いしながら、三千太郎は縫之進のキセルをひよいと取り上げて、深く煙を吸い込んだ。

コンモも煙草入れからキセルを取り出すと、

「正道のやつ、大政奉還の報に接して寝込みまってるぜ」と声をおとして、火打石を力チカチ鳴らした。

総三郎は、人差し指を伸ばしてちよいちよいと豊の肩をつつき、房の外に向かって顎をしゃくった。豊は酔っぱらって上機嫌だったから、呼ばれるがまま廊下へついて行った。

「豊、改めて申す。おまえがこんなところに入れられたのは、かえすがえすもわしのせいである。ゆるせ」

と深く頭を下げた。

総三郎のしょげかえった顔を見た豊は、ぷっ、と噴き出し、そのままお腹を抱えて笑い出した。笑上戸になっている。

あんまり笑い過ぎて涙まで流した豊は、軽くみぞおちを叩き、しばらく呼吸を整えていた。やがて、

「獄舎を出たら、これを機に、母さんと一緒に江戸で暮らすよ」と言った。

「江戸って、おまえ……」

「前からずっと決めてたんだよ。なをのことがあったし、ミチタのことも心配だったから延び延びできちゃったけど、心機一転、江戸に行く」

豊はさばさばとした面持ちで獄室へ戻った。

格子の中に年越しそばが運び込まれると、幸左衛門は皆を見回して居住まいを正した。

「罪とがない家族が、こうして獄舎につながれておるのはいかにも口惜しい。だが、このような仕打ちにあうと、いっそう身内の尊さがわかってもくる。一年の締めくくりに家族と蕎麦を食べると、来年もソバにしよう、という気持ちが深まるという。そんな縁起を担いで、今宵は家族と共にこの蕎麦を味わいたい。汁はくにさんの味付けだから、美味しいこと請け合いだ」

楓江が天井を振り仰いで「霜鬢明朝、又一年」と唸ると、幸左衛門は深くうなずいて、「歳ばかり取ってしまえますなあ」と感慨深げに笑った。

「さあ、冷めないうちにめしあがれ」クニが祝い箸を配ると、豊が真っ先に手を伸ばした。

やがて遠くから、除夜の鐘が聞こえてきた。ここまで聞こえてくる鐘の音は、きっと矢那川の向こうにある西光寺のものだろう。近くに処刑場があって、生前なをは、そこを通るのが怖くて川舟を使って木更津に来ていた。三千太郎はふと、そんなことを思い出した。

明けて慶応四年は正月の三日から、不穏な空気に包まれている。大阪城にいた徳川慶喜は、江戸の騒動を受けて薩摩藩討伐を表明し、幕府軍を京へ進発させた。

ついでながら「幕府」とは、武家政権のことであるから、すでに大政奉還によって消滅している。この時点では「旧政府」または「旧幕府」が正確な呼び方で、朝廷が「新政府」である。しかしこの先も、「幕府」の呼称はこのままにしておく。

大阪を発した幕府軍は淀城で二手に分かれ、会津藩兵を先鋒とする本隊は陸軍奉行竹中重固が率いて伏見街道を進んだ。一方、陸軍奉行並大久保忠恕の率いる別動隊は「討薩表」を所持した大目付滝川具拳を同道し、幕府歩兵二大隊、会津藩お預かりの見回組二百名、砲六門を曳きながら鳥羽街道を北進、主力は山崎のあたりを進軍中であつた。

鳥羽街道の別動隊が鴨川にかかる小枝橋にさしかかったとき、時刻はすでに午後四時ごろとなっていた。橋は薩摩軍によって封鎖されており、幕府軍が入京するのを頑として拒んだ。関門から軍監の椎原小弥太が進み出て、馬上の滝川具拳と、

「通せ」「通さぬ」

の押し問答になる。双方一步も引かない。

業を煮やした幕府軍の砲兵士官、石川百平と大河原銀蔵の二人が、関門に照準を定めて砲弾を装填していると、突如、橋の東側にある城南宮の森から耳をつんざく砲声がとどろき、路上の四斤砲一門と石川、大河原両士を粉々に吹き飛ばしてしまった。撃つたのは薩摩軍の伏兵で、この一発が、翌年まで続く内戦へ戊辰戦争への開戦を告げた。

この時、幕府の凋落を象徴するような出来事が起きている。先頭で薩摩藩士と言い争っていた大目付滝川具拳を乗せた馬が、砲弾の炸裂音に驚き、躍り上がって後方へ逃げてしまったのだ。後続の兵士たちは指揮官が遁走したのだと思い、前線が敗れたと錯覚してたちまち大混乱に陥った。歩兵の多くが銃器を捨てて逃走してしまった。それでも見廻組や桑名藩の大砲隊は踏みとどまり、伏見方面も会津兵と新選組が刀槍による突撃を繰り返し、劣勢を引きずりながらもかううじて戦線を支えている。

翌日も闘志と火炮に勝る薩摩の優勢は続き、幕軍諸藩の戦意は振るわない。兵馬最強の徳川を恐れて弱腰だった朝廷もようやく奮い立ち、正月五日、ついに淀川の河畔に錦の御旗が翻る。

尊王を標榜している薩摩、長州、土佐の藩兵を、朝廷がへ官軍として正式に認可したのである。これは同時に、幕府側がへ賊軍になった瞬間でもあつた。

日本という国の特殊性は、国造りの神を先祖とする天皇への畏敬を、太古より連綿と継

承し保持してきたところにある。戦国時代の一時期、天皇離れが起きかけたが、徳川の幕政下で再び思想的に見直され、天皇こそ日本を統べる絶対者であり、武家は庶政と軍事を預かる臣下であると定義されるようになった。これを理論化したのは御三家の水戸光圀であり、武家側から尊王思想が萌芽するのも不思議な話であるが、幕府が採用した官学が儒教であったことを考えれば、この思想によって君臣の義が正され、天皇の存在によって幕府の正統性が保証されたともいえる。後醍醐天皇と終生反目し合った足利尊氏などは国史上大悪人であり、室町幕府は正統な政府ではなかったとされている。この光圀の思想が後世へ水戸学と呼ばれ、尊皇派の思想的根拠となっていた。

徳川慶喜という人は、水戸光圀の子孫なのである。そうであったからこそ、将軍は庶政と軍事をつかさどるといふ使命に燃えて戦ってきたのであった。しかしその結果、賊軍の大將にされてしまうという皮肉に直面したとき、これまで自分を支えてきた心棒が、ぼきりと折れてしまった。頭の中が真っ白になり、

「一刻も早く戦線から離脱し、江戸へ戻って謹慎しよう」と血迷ったのは、それほど賊軍の汚名を恐れたからである。

慶喜は側近のみを連れて密かに大阪城を脱し、天保山沖に停泊している幕艦「開陽丸」に乗り込み、錨を上げた。家臣たちを戦場に残したまま遁走してしまった。

将軍が戦線離脱したなど誰も予想だにしていない。請西藩主林忠崇は、大阪で勃発した戦争に加勢すべく、渡海船の調達を急いでいた。正月九日、藩兵一小隊と砲一门を曳いて品川沖に停泊している大型船に乗り込んだが、海が荒れてなかなか出帆できず、十三日払暁、ようやく浦賀港にたどり着いている。途中、沖合で蒸気軍艦一隻とすれ違った。

「あれはどここの船ぞ」

忠崇は側近の伊能矢柄をかえりみた。二人とも具足一式を身に付け、陣羽織を着用している。

内戦となったからには、海上でさえいつでも戦場となり得る。伊能は緊張した面持ちで

目を凝らしたが、藩籍を示すような旗の類は一切翻っておらず、煙突から黒煙を吐き出しつつ、全速力とおぼしき速さで通り過ぎてしまった。

「あれほど大型の鉄艦であれば、きっと我が方の船でしょう」とは言ったものの、伊能は不審そうに船影を眺め続けた。我が方の艦船であるなら、なぜ上方で戦の真っ最中に東上しているのだろう。

港に入っただけで、忠崇は伊能と大野禧十郎を浦賀奉行所へ派遣した。

空がにわかにかき曇り、雁木に高波が打ち寄せている。

寒風がふきすさぶ中、伊能と大野が顔を蒼白させて戻って来た。

「申し上げます」と言ったとき、伊能は口を真一文字に引きつらせたまま、次のことばが出て来ない。

代わって大野が手を付いて報告した。

「大樹公、すでに帰城したとの由。事の委詳はわからずとのことにござります」と一息に述べたが、その声は動揺を隠せず、かすかに震えている。

「そんな、馬鹿な話、あるまい」と忠崇は口ごもった。

伊能がようやく口を開き、

「昨日すれ違った艦船が、將軍を乗せた幕艦だったのでありますまいか」と声を落とすと言った。

風に交じって初雪が降り始めたようであった。板戸ががたがた音を立てた。

忠崇は重い面ざしを二人に向けて、

「そなたら、ただちに早船で江戸へ返し、將軍東帰の是非を確認してまいれ」と念を押すように申し付けた。

十四日夜、伊能、大野と入れ違いに江戸藩邸から清水半七が駆けつけ、江戸詰家老小倉多左衛門からの書状を忠崇に届けた。

そこに、慶喜が在府の諸大名に発したという『内諭の書』が同封されていた。

へこの分には過多の人命損じ候のみならず、宸襟を安んずべき誠意も貫徹せず、ついでには

今後の深き見込みもあれば、部隊を引き上げ、軍艦にてひとまず帰府いたし候。おって申し聞かせ候儀これあるべく候

という。「深き見込み」があるというのだから、將軍のたった一連の不可解な行動も、何か大きな戦略の一環なのかもしれないと忠崇は理解した。よって家老の「急ぎお戻りくだされたし」の指示に従い、海路帰府の途に着いたのである。

江戸城内で、連日大評定が続いている。忠崇もさっそく登城し、菊の間縁頼詰めの譜代から情報を収集した。沸騰する話題の渦中に小栗忠順がいる。この日、小栗と榎本武揚が芙蓉の間からそろって黒書院に入ったという。現役の勘定奉行兼陸軍奉行と軍艦頭が將軍と謁見するのである。今後の戦の方針を立てるに相違ないと忠崇は思った。

平伏した小栗は、やおら顔を上げると、眉目の間に怒りをみなぎらせて声を上げた。

「上様、諸藩が形勢を観望している状況で、みすみす大阪城をお捨てになられるなぞ、あまりのご失態にござりませぬか。乱臣の手勢は数千程度だったと聞き及んでおります。なぜ城にご籠居遊ばされなかったのです」

平素なら聞き捨てならぬ言であろうが、慶喜は焦燥した顔をうつむかせたまま黙っている。

「今からでも遅くはありません。軍艦を駿河湾に遊弋させ、東海道を進軍してくるであろう敵兵を艦砲により駆逐なされませ。しかる後、艦隊を二手に分け、一隊をもって摂海を抑え、もう一隊をもって下関、鹿児島へ遠征し、敵の本拠地を衝く」

この小栗の戦略は、軍艦頭の榎本からしても理にかなっている。薩長ごとき、海軍が総力を挙げれば赤子の手をひねるようなものではないか。

「勝機は我が方にあります」と榎本も身を乗り出して賛同した。

しかし慶喜は、あたかも叱責するかのように、

「錦旗が出たのだぞ」

と低い声でつぶやいた。

「もはや、是非に及ばず。薩長は官軍である。この上反抗なぞ致せば王臣の道に背くこととなり、百世の後まで逆賊の烙印を残すこととなろう。抗戦はせぬ。余は寛永寺にて謹慎致し、ひたすら恭順に相務める」

『内諭の書』に書かれた「深き見込み」とは、このことであつたかと二人は落胆した。

戦意を完全に喪失している慶喜を叱咤するように、小栗は膝をにじり出して言上する。

「いま様が降参遊ばされれば、それこそ逆賊の刻印は避けられますまい。なればこそ、奸藩を打ち負かし、錦旗を奪い返さねばなりません」

「それは尊氏もしたことでぞ！」慶喜は声を荒げた。「その結果どうなったか。南北朝史に払拭できぬ汚点を残し、史上最大の賊とされておるではないか。そなたは余を第二の足利尊氏としたいか。朝廷から宣戦布告を受けた以上、悔悟謝罪するより他に汚名をそそぐ道はあるまい」

「ならば家臣はどうなるのです」小栗は拳で膝を打った。「朝敵となることを恐れてお見捨てになるのですか。旗本八万騎が路頭に迷ってもかまいませんぬか」

「そうは、申しておらぬ」口ごもった慶喜の目に光るものがにじんだ。もはやなすすべもなく、万策尽きたようにうなだれている。

小栗はさらに声を励まして言った。

「我が方には東洋一の艦隊もありますれば、まずは関東、東北諸藩を取り纏め、東国に割拠して雄を養い、乱臣どもの討伐に打って出しましょう」

慶喜は生色を失ったまま「戦費はいかが致す」と力なげに問うた。「フランスからの借款も御破算となり、今や西国の直轄領も、長崎、大阪、堺の利権も失われた。この状況では、戦費を賄えぬ」

「勘定奉行のそれがしが、各国から金を借りてまいります。この期に及んでは借金をしてでも戦うべきと存ずる。現在の朝廷は幼帝を奉る薩長の傀儡に過ぎませぬ。兇徒が錦旗を翻すなら、我らは大義の旗を掲げるのみ。恐れながら上様、ここで御奮起遊ばさねば、何

をもって東照公に地下で見えん」

という小栗の主張はもつともであり、家康公の御霊に顔向けできぬと迫られれば二の句も継げないが、慶喜にとってただ一点、どうしてもゆずれないところがあった。それは、「外国から借金をしてでも」

という部分である。

もし返済に行き詰れば、国土が列強の質となり、港を奪われ、関税を取られ、居留地を売り渡すはめに陥らないともいえない。慶喜はいつか読んだ『海外新話』という書物を思い出していた。このままでは清国の轍を踏むことになりはせぬか。日本が外国の植民地とされる危険を冒してまで、反撃すべきなのか。

膝もとに突き立てた扇子を握って、慶喜は瞑目した。西日がかげり、書院が薄暗くなってきた。黙考し続けた。やがてお坊主衆が口ウソクを灯し始めるころ、慶喜はようやくまぶたを開き、小栗の顔をじっと見据えた。

「ただ今をもって、勘定奉行並びに陸軍奉行の免職を申渡す。下がるがよい」

小栗は目を見張った。榎本も茫然と息を飲んだ。頑としてゆずらない面持ちの慶喜に向かって二人は平伏すると、中腰のまま書院から退出した。

その直後、慶喜は近習に声をかけ、

「勝安房守を呼んでまいれ。至急じゃ」と命じた。

小栗が江戸城本丸大玄関を出ると、福田八郎右衛門の率いる騎兵隊が整然と並んでいた。金裏藍の陣笠をいただき、縦詰襟の戎服にブーツを履いて、西洋風の筒袖陣羽織を羽織っている。馬は在来種の木曾馬であるが、鞍などは洋式の馬装であった。

慶応二年からフランス式軍制を採用している幕府陸軍は、ようやく士官が育成されつつある。福田は彼独特の甲高い声を上げて、

「アタンシオン（気を付け）！ サリユ（敬礼）！」と仏語で部下に号令した。

小栗は押し黙ったまま馬鞍に跨った。

福田の階級は騎兵頭並であり、現代の中佐に相当する。幕府騎兵二箇連隊のうち半隊を統括していたが、普段は仏語通辞の仕事に忙殺されている。シャルル・シャノワーヌ以下十九人の軍事顧問団がまだ日本語に慣れていなかったからである。

福田が配属された騎兵隊は、流鏑馬に特化した和式馬術から洋式馬術への移行に手間取っており、まだ戦場で実用される段階には程遠く、高官の護衛や伝令に用いられているばかりであった。補足ながら騎兵が体を成すのはこれよりずっと後、明治陸軍において秋山好古がその任を担ってからのことになる。

オランダ製の軍帽を目深にかぶった榎本武揚も、消沈した面持ちで福田に会釈すると、馬首を返して築地の海軍所へ帰って行った。

小栗の護衛十頭あまりは轡を並べ、乾いた馬蹄を響かせて陸軍所の門をくぐった。ただちに幹部が集められ、陸軍奉行罷免の件、直接本人が説明した。これまで七十回ほど役職の降格や罷免を受けてきた小栗であったが、今度ばかりはいつもと様子が異なり、この人にしてはめずらしく意気消沈している。去り際に福田を控えの間に呼び出し、ここでようやく何か吹っ切れたような笑顔をみせた。

「八郎右衛門、ここへ来る道々ずっと考えておったのだが、將軍から直接免職を言い渡された家臣は、徳川二百七十年の歴史の中で、わし一人ではなかるうか」

と言われてみれば、福田も前例を知らなかった。

「そうだったかもしれませぬ」と答えると、小栗は膝を打って笑い出した。

「これもある意味、我が一族の武勇伝となろう。ここが引き際じゃ」

「なにを申されますか。今こそ小栗様の采配が必要なときです」

「いや……」と行灯の明かりに目を向けていると、下士官が茶を運んできた。

その熱い茶を一口ぐっと飲み込むと、小栗は低いかすれた声で言った。

「將軍はすっかり腰が砕けて、もはや戦う意気はいささかもない。君家が戦わぬのなら、三河武士の後裔は滅ぶのみ。よってわしは知行地の権田村で隠棲する」

「おまちくだされ」と福田は慌てて膝をにじらせた。「それでは我が陸軍はどうなるので

す。小栗様が手塩にかけて育てた組織ではござりませぬか。大将不在ではにっちもさっちも行きませぬ。どうかここに留まり、佐幕の赤心を貫かれてくださりませ」

「將軍が、これで終いと決めておるのだ。臣下はそれに従うのみ」

いつもは温厚な福田が、これにくってかかった。

「大樹公は利根過ぎたる大将にござれば、南北朝史だの水戸学だの、空理空論にまどわされ、正気を欠いておられるに相違なく、謹慎恭順なぞは笑止千万。日光の御神意に適うものではござらぬ！」

慶喜は頭でっかちで、武士の本分を忘れ、日光東照宮に祀られている家康公の意志に背いているのだ、と言っている。

「ひかえよ、八郎右衛門！」と小栗も声を上げたが、懽然とまた一口茶をすすると、気を取り直したように口元に笑みを含んだ。

「君臣上下の別は天地自然の儀則ぞ。古臭いと笑われるかもしれぬが、わしは武士らしく天倫に従って生きたいと願うておる」

そう言っただけを飲み終えると、つと立ち上がり、わずかな持ち物を風呂敷に包んで陸軍所から出て行ってしまった。

この後、小栗忠順は一家そろって上州権田村へと移住した。帰農して余生を過ごすはずであったが、慶応四年閏四月四日、突如新政府軍に捕縛され、何の取り調べもされぬまま家臣三名と共に斬首された。

「何か言い残すことはないか」と聞かれた小栗は「自分に関しては何も無い」と答え、

「母と妻はすでに逃がした。どうか婦女子には寛典を望む」と付け加えたという。

刑を執行しようとする新政府軍の兵士たちと、それ阻止しようとする村人の間で激しい口論となったが、小栗は皆をかえりみて、

「お静かに」

と言った。これが最期のことばとなった。

小栗や水野痴雲といった交戦論者が軒並み左遷され、どうやら最後の幕閣の首班に任命されたのは勝海舟であるらしいと、江戸城菊の間に詰めている林忠崇の耳にも噂が届いた。譜代大名の持ち回りであった老中制が廃され、勝のような旗本が取り立てられるのも、政治の中枢に人材が不足しているからに他ならず、忠崇は溜の間詰の不甲斐なさに憤りすら覚えるのだった。そもそも勝という人物は幕臣としての自覚が薄く、かつて慶喜が構想していた「徳川大君制国家」にも反対しており、政治は雄藩による連合、海軍は諸侯と共有せよなどと日ごろから暴論を主張している。それがもつて慶喜から疎まれ、政界からも罷免されていたような男なのである。事ここに至っては大老井伊直弼のごとき強権発動さえ望まれているこの時機に、なんぞ勝ごとき軽輩に幕府の舵をゆだねるのか、忠崇にはまったく理解できなかった。「いよいよ幕府が危ない」という思いを深めるざるを得ない。

先日、万里小路局の荷送りを任せられていた浅野作造が木更津から戻って来て、「万事支度は整いましてござります」と御前へ進み出たが、その場に居合わせた誰もがあっけにとられたのは、作造が白装束を着ていたからである。御座の間上段でまて様と並んで着座していた忠崇は、その恰好を見て、一瞬鳥肌が立つほどの緊張感を覚えた。

作造は膝前に短刀を置くと、両手を付き、平に伏した。

「恐れながら」

と神妙な声色で言上するには、木更津湊にて野盗に襲われ、調度品のうちの三点、夏用の管枕、爪とり鋏、定紋入り盥を盗難された失態は死んで詫びるより他なく、この場で切腹仕りたい、と言う。これがこけおどしではなく、即刻腹を切るつもりであろうことは、作造の張り詰めた面差しを見れば疑いもない。

これぞ武士の本分であろうと忠崇は膝を打ちたいような気持ちになった。ちらと傍らをのぞき見ると、まて様も作造の義士ぶりを愛でるように微笑んでいる。

作造はさらに、先日頂戴した陣羽織も野盗に切り裂かれてしまったことを詫びた。

「面を上げうしよーん巻こまて兼り吉は悪やかどっこ。

作造が視線を落としたまま顔を上げると、なるほど頬にも数か所切り傷が残っている。「爪とり鉋と引き換えに、そなたの命を失わずに済んだこと、まこと幸いでありました。陣羽織なら、また新しきものをつかわそう」

まて様は顔をほころばせてうなづいてみせた。

作造は再び両手を深く付くと、額を擦りつけるように頭を下げたまま、木更津の人々が荷を守るために戦ってくれたこと、特に義勇隊と家中の諏訪数馬の世話になったことなどを言上した。そして、関東取締出役に捕縛されている三名のことにも触れ、何卒よしなお取り計らいくだされたし、と付け加えた。

これについては忠崇が「相分かった」と承諾し、続けて、

「浅野作造頼房、この度はまこと大義であった。いやしくも武士たるもの、そなたのような覚悟を本意の第一とすべきである」と懇ろなことばをかけずにはおれない。

作造は「ははッ」と大音声を上げて打伏し、恐懼感激の涙を流した。

あの者こそ、と忠崇は思うのである。死を常に心にあつるもののふの鏡であろう。天下の風雲いよいよ急であれば、余も華々しく戦って討ち死にせねばならぬ。

にしても、勝海舟とは、あまりにもひどい人選ではないか。勝の本氷川の邸宅には、薩長の志士らが頻繁に出入りしているともっぱらの噂であり、薩摩の大将西郷隆盛とは公然と交誼を結んでいるという。しかも頻りに幕政を批判しているというから、あるいは敵方と通じているのではあるまいか、と忠崇は危惧する。勝安房守といえば石高四十一石の貧乏旗本の出で、蘭学を学んで海軍伝習所の一期生となり、日本で最初に太平洋横断を成し遂げた咸臨丸の艦長を勤めたが、航海中はずっと船酔いで寝込んでいたらしい。小栗忠順と並ぶ幕末の筆頭官僚であるが、小栗が主戦論の先鋒であったのに対し、勝は非戦論を公言してはばからない。その勝が再び登用されたとすると、もしや將軍は、戦わずして降伏遊ばされるおつもりであろうか。とこれは忠崇一人の憶測ではなく、江戸城内に行き交う

風評でもあった。

黒書院にて、勝は慶喜と対座している。

英邁の誉れ高き天下の大將軍も、今では無位無官、目の下にはっきりとくまが見て取れ、痛々しいほどやつれた様子である。長らく反目していた主従であったが、さすがの勝も慶喜の心中を察して胸が痛んだ。

慶喜の方も、すべてを失いただ一人沈黙考してみれば、勝がなにゆえ徳川大君政府構想を批判し、海軍は諸侯と共有せよと献策したのか、今となってはわかる気もする。かの者は、すでに幕藩体制というものが機能不全に陥っていることを既成事実として認め、八洲を一つの「国」として運営せねばこの先は立ち行かないと悟っていたのであろう。実際、内戦などしておれば各国から干渉を受ける事態は避けられず、借款や援軍を求めれば、それを口実にして国土が蹂躪されてしまいかねない。もはや幕府を存続させることが既得権益を守ることではしかないのだとしたら、自分の代で幕を引くこともやぶさかではない、とさえ慶喜は思いつめている。しかし問題は、新政府に降参した後、幕臣の暮らしをどう立ててゆけばいいのか、その一点のみであった。

慶喜が勝を陸軍総裁に任じ、幕閣の首班としたのは、これらの危惧をいちいち説明する必要がなく、ただ一言、

「徳川社稷を死守せよ」

と言えすべてが伝わるとわかっていたからであろう。

熨斗目、長上下で平伏していた勝は顔を上げると、射貫くように慶喜の双眼を見据えた。

「今や、容易ならざる事態に立ち至り、もはや家名の存続を図るなぞ致し難い次第にござります。それがし、つらつら考えてみますに、まず第一に、今後はそれがしの方針を全面的にご支持くださりませ。そうでなければこの難局は乗り切れませぬ」

と鋭く言上すれば、慶喜は黙ってうなづくのみであった。勝は威儀を正した。

「それがし、世上札付きの和平論者と思われておりますが、君家の御ためとあらば、ど

のような汚き駆け引きも致す所存。及ばずながら、一死をもって主家に殉ずる覚悟にござります」

よしんば敗軍の将として首斬らるるとも、我が戦いぶりを地下の権現様もご覧あれと叫びたい心持であった。この辺り、血は争えないというべきか、勝もまた徳川直参としての誇りをいささかも失っていない。

御府内がびりびりしていた頃、請西藩境に建つ古びた湯屋の傍らに、白い梅の花がほころんでいる。

脱衣場の駕籠に放り込まれている浴衣と湯文字は豊のもので、今日も昼日中からのんびりと湯に浸っている。

江戸っ子の風呂好きは有名な話であり、朝夕と日に二度はかかさず湯屋へ通うという。関東の気候は湿潤のため肌がべたつきがちで、そこへからっ風が砂ぼこりを吹き付けてくる。肉体労働者などは一日禪一丁で働いているから、ざっと体を洗い流したくなるのは当然だろう。しかし失火で火事でも起こせば死罪となるから、どの家も風呂を持ちたがらず、銭湯通いは庶民の生活の一部となっていたのだった。料金も大人八文といえは百二十円程度しかかからない。江戸市中だけでも四百軒以上の湯屋があり、朝から晩までにぎわっている。

木更津近郊の風土も江戸とさして変わりなく、湯屋の盛況はここも同じであったが、海運業従事者と農家ばかりだから、混みあうのは夜明け前と暮時で、豊が足げく通う日中は客もほとんどいない。当時の銭湯は入込湯と呼ばれ、これこそが外国人を驚かせた混浴という風習であった。しかしながらそれなりの気配りはされており、浴場内には天窓も灯火もなく、湯気が立ち込めて互いの姿かたちが見えないほどになっている。浴槽はざくろ口という低い出入り口で仕切られ密閉されており、蒸気と熱気を逃がさない造りとなっていた。浴客は腰をかがめて中に入り、十二歩進むと浴槽がある。歩数を数えて進まなければならぬほど視界がきかなかった。湯の温度は五十度ほどにもなり、長風呂をするには熱

すぎる。現代のスチームサウナにちかい感覚だったのかもしれない。

髪を短くして以来、豊は風呂が好きでたまらないのである。鬘を結っていた頃は、長風呂をすると頭皮が蒸れてかゆくなったものであった。しかし今では、湯くみ口から新鮮なお湯をもらって好きなだけ髪を流すことができるのだ。あがり際に冷たい水を浴びるのも気持ちがいい。

目を閉じて浴槽に腰かけていると、男とおぼしき人影がざくろ口をくぐり、ざぶんと湯に浸かった。もうもうたる湯気で何も見えないにせよ、豊は手拭いで胸を隠し、開いていた両脚をそっと閉じた。しばらくすると男は温まってくつろいだらしく、いい声で謡をうなりだした。この人もたいそうな風呂好きなのだと思えば微笑ましく、豊は再び目を閉じたが、どこか聞き覚えのある声であり、九尺（2・7メートル）四方の狭い浴槽であれば、すぐそばに感じている相手の気配も他人のものとは思われない気がする。豊はかしこまって咳払いをし、

「もし。兄さん、お名は」と遠慮がちに尋ねてみると、男は謡を止めた。

「その声は、豊か」

というその声は、伊藤実心齋であろう。

お互い顔を突き合わせて目を見開いた。

「おまえ、牢屋にいるはずじゃなかったのか。まさか、脱獄しおったか」などと、冷静沈着な実心齋にしてはめずらしくうわずった声を上げた。

豊はぷっと噴き出し、

「さすがのあたしも脱獄なんてしないよ。風呂に入りに来ただけさ。寝起きはちゃんと牢屋でしてるよ」

と顔の汗を拭いながら大笑いした。積もる話は山とあるが、浴室は薄暗く湯気が立ち込めて何も見えないから、豊は実心齋の背中を押ししてざくろ口をくぐり、洗い場に連れ出した。

水船から汲んだ水を頭から浴びると、さっと両手で髪を梳いた。

「実心さん、ここで会ったが百年目、ひさしぶりに背中を流してあげるよ」と言って、ひっくり返した桶の底をぼんぼんっと叩いた。

「おまえな、さすがにもう子供じゃないんだから、そんなに男の前で大らかに肌をさらすな」と苦言を呈して実心齋は桶に腰を下ろした。

豊にとって四つ年上の実心齋は実の兄のようなものであり、子供の頃は剣術稽古が終わると毎日のように三千太郎や常盤之助と連れ立って湯屋へ通ったものだった。

実心齋の風呂好きは昔から有名で、日に五回も六回も入るから、町の人々から「垢ぬけ実心」とよくからかわれたものであった。現代風にいえば、あるいは潔癖症だったのかもしれず、朝は太陽を拝むとまずは部屋中を掃き清め、整頓し、雑巾がけをして、綺麗な模様に入った愛用の茶碗を念入りに磨いてから朝食をとる。昼は稽古着を着たままた掃除をし、夕方は必ず庭に水をまいた。着物も何度も取り替えた。頭の中はいつも剣術のことについてばいで、流祖中村一心齋に心酔すること宗教のごとくであり、師が愛飲していたという蓬の粉末を自分も毎日欠かさず飲んでいるせいか、女のように肌艶が美しく、中年となっても美顔が衰えない。が、あまりにも剣に打ち込み過ぎて婚期はとうに逃している。「実心さん、今までどこへ行ってたんだよ」と背中を糠袋でこすりながら豊がたずねると、ふっと鼻を鳴らして、

「門弟のところを泊まり歩いておる。剣理を極める旅すがら、お前たちがお繩にかけられたと知って、様子を見に来たのだ」と振り返って答えた。

実心齋は立ち上がると、入れ替わって豊を桶に座らせた。そして背中を洗ってやりながら、

「元気そうでなによりだ」と安堵したように笑った。

洗い場でも脱衣場でも帰りの道々でも、実心齋は豊を相手に剣術の話ばかりしている。

子供のころ赤ら顔だったというなつかしい逸話は今でも身内の口の端にのぼるほどで、総三郎だけは彼のことを「あかじゅう」などと当時のあだ名で呼んでいる。湯上りの頬を紅

潮させ、身振り手振りを交えながら術理について最新の見解を語る実心齋の表情は未だ少年のようであった。豊はそれを微笑ましく思いながらも、女の立場から見れば、これでは嫁の来手もなかうと、実心齋が美丈夫であるだけに惜しくも思える。

豊と連れ立って獄舎に入って来た実心齋の姿を見て、「うわあ」とうなだれたのは平右衛門であった。三千太郎の獄室に荷物を置いた実心齋の傍らに膝を付くと、

「実心さんよ、おまえさんの言う通りだったぜ。剣客が政事なんぞにかかわっても口なこたあねえ。しょっぴかれて思い知ったぜ」と頭を下げた。

獄室の隅に三千太郎が借りている楓江先生の蔵書が積まれていたが、実心齋はそれに気づいていただろうか。座り込むなり身を乗り出して、

「立ち向う時の心は明月の隈なく照らす姿なりけり」

という中村一心齋の論歌を詠じ、野盗と打ち合ったとき、このような境地に達したかと二人に問うた。

平右衛門はますますうなだれて、

「おれは真剣で挑んだけんどうよう、連中、逃げ回っちまって、それをただ追いかけて回していただけさ」と面目なさそうに頭を掻いた。

三千太郎はしばし考え込んでいたが、染谷に諸手突きを繰り出した瞬間、そのような気持ちになったかもしれないと思ったりもした。

「でも、ほんの一瞬のことだったよ」

ふーむ、と実心齋は腕を組んで目を閉じた。

そのまま黙り込み、空腹を覚えた豊のお腹がぐううと鳴るまで長い沈黙が続いた。

煮売屋の親子が二人がかりで食事を運んできた。湯屋の帰りに豊が実心齋と楓江先生の方も注文してきたのである。楓江が今夜も飲みに来るかどうかわからなかったが、豊は毎晩先生の分まで注文してくる。来なかったら来なかったで食欲旺盛な自分たちで食べてしまえばいいと思っているのである。

いわしのすりみだんごの煮つけと、塩漬けタケノコの天ぷら、切り干し大根、ふき味噌

など、心なしか酒のつまみのようなおかずが増えてきたのも、煮売屋が毎晩の酒量から察してくれた心配りだろうか。晩酌が単調な獄舎暮らしの一番の楽しみとなっている。

果たして今夜も楓江先生はふらりとやってきた。牢番に海苔などの手土産さえ持つてくるほど顔なじみになっている。三千太郎の獄に精悍な顔立ちをした先客がいるのを見てさっそく好奇心の目をか輝かせた。実心齋とは初対面である。

互いに名乗り合うと、楓江はまっさきに実心齋という名の由来に興味を示した。

「これはもしか、実心おこらずは仏法かないがたし。からとつた齋号ですかな」

と推測すると、実心齋は感心したように深くうなずき、

「ご明察恐れ入ります。それとも一つ、実不実を見分け、気をもって立つべし。という小谷三志の言葉を先師が好んで用いておりましたので、若輩ながらそれを号として、剣の道を究めんとしておる次第です」と大真面目な面持ちで応えた。

楓江は膝を軽く打つと、

「おぬし、求道者であるな」と好ましい様子であった。

しばらく酒を交わしながら雑談にふけていたが、やがて実心齋は打ち沈んだように酒器の底に視線を落とし、深く首を傾げるのだった。

「この頃、わしはわからなくなるのだ。一心齋先生はなぜ、治国安民のようなお考えを、わざわざ剣術に持ち込んだのであろうか。兵法の目的とはそれこそ、宮本武蔵の言うように、一身の斬り合いに勝ち、数人の戦いに勝つことではないのか」

我が意を得たり、とばかりに平右衛門が「おれも前からそう思ってたんよ」と声を上げた。

「剣の道はよ、まず何をおいても勝つことだべ。そうでなかったら斬られっちゃうんだから」

このような議論は不文律として不二心流宗家では禁忌とされているところがある。だからこそ実心齋は、ありあまる才能と技量を持っておりながら、いつもはみ出し者とならざるを得ないのだった。今宵の実心齋は、これまでの無念を爆発させたように不満を口にし

た。

「流祖の言う、兵法の要は治国安民に止まる、なんぞ戦闘のためのみならんや、を是とするなら、そもそも剣術などしなければいいではないか。実際、オヤジにしても正道にしても、稽古をおろそかにし、世直しなどとぬかして日夜駆けずり回っておる。それが不二心流の流儀であるなら、我らは二尺三寸の太刀に何を見出せばよいのか」

そうまくし立てた実心齋の目が、少しばかり潤んだようにもみえる。

楓江は、豊に酌をしてもらいながら、じっと実心齋の言葉に耳を傾けていた。そして、自分は門外漢であるけれども、とまずは断りを入れた。

「三代將軍の兵法指南だった柳生宗矩が、兵法には大なる兵法と小なる兵法があると述べておったように記憶しておる。そなたらの流祖が申しておることも、これと同じ趣きなのではないか。世を治める実質的な武、すなわち徳川幕府のようなものが大なる兵法で、一対一の決闘のようなものは取るに足りぬ小の兵法であると」

すりみだんごを頬張っていた豊は、それを聞いて眉をしかめた。

「そんなら実心さんの言う通り、剣術なんてやらなくなっただけのことになっちゃう」

平右衛門の方はまんざらでもないといった様子で、

「それなのにおれたちの流派、手練れ揃いで総州一強いんだよなあ」と自嘲するのだった。

楓江は天井を見上げ、目を閉じて唸った。

「宗矩は、こうも申しておる。太刀先の勝負は心にあり、心から手足をもはたらかしたるものなり、と。そなたらの流祖の言を率直に解するなら、世を憂い、民の幸福を願う心が備わってこそ、剣に義が宿ると申しておるのではあるまいか」

これまでの議論を黙って聞いていた三千太郎が、

「おれは先生の解釈に賛成だな」とつぶやいた。

しかし実心齋はなお納得がいかない様子で、

「それならば、正しいのはオヤジや正道の方なのか」と悔し気に顔をしかめるのだった。

火鉢の炭を起こして五徳を置いた。酒の後で食べるあさりのふうかしは美味い。

「実心さん、そんなに思いつめたら体に毒だよ」

豊は汁を温め直した。

慶応四年二月三日、大総督府が設置され、有栖川宮熾仁親王が東征大総督となり、二月十五日、新政府軍を率いて京を進発した。いよいよ江戸城が攻撃される。

天皇帝新時代の到来を告げる錦旗は、萌黄牡丹唐草模様の緞子に金糸で菊花紋が縫いとられており、頭上高らかに掲げられ、きらきらと風になびいている。馬標は赤地錦二重織小葵紋地に金糸で菊花紋が縫いとられていた。新政府の兵たちはイギリス式調練を受け、全員が真新しい元込めミニエー銃を肩にかけている。先の尖った鉢振りを被り、紺の筒袖にズボンをはいて、白い帯に打刀を差していた。この当時の洋式軍装は縦詰襟に黒生地が主流で、今日の学ランとほぼ同じ外見である。参考までに、和服の袖を細くしたものが筒袖、袴を細くしてズボンのようにしたもののが段袋と呼ばれる。洋服への移行期であり、幕末の古写真などを見ると、和洋折衷の装いが多く、学ラン型の軍服に陣羽織を羽織ったり、筒袖にコートを着たりと趣向様々で面白い。坂本龍馬がブーツを履いていたのは有名であるが、大総督府参謀の西郷隆盛はズボンに草鞋履きだった。個々の好みが身だしなみに大きく反映されていた。

東征軍の行進でひとときわ沿道の注目を集めたのは軍楽隊の存在であろう。西洋のスネアドラム、バスドラムを叩き、篠笛でメロディを奏するという、これも移行期の和洋折衷で、兵士たちは音楽に合わせ「トコトンヤレ節」という行進曲を歌った。

へ宮さん宮さん お馬の前に

ひらひらするのは 何じゃいな

トコトンヤレ トンヤレナ

あれは朝敵 征伐せよとの

錦の御旗じゃ 知らないか

トコトンヤレ トンヤレナ

大総督の指揮下、東海・東山・北陸三道を先鋒総督兼鎮撫使の軍団が大砲を曳いて進軍し、江戸城総攻撃は三月十五日と決している。徳川慶喜は死罪、徳川家の所領はすべて没収という断固たる方針を打ち立てていた。

二月七日頃から、江戸は騒然としている。というのも、鳥羽伏見の戦いに敗れて引き揚げてきた幕軍の兵士たちが暴徒と化していたからである。正確には歩兵第十一、十二連隊の兵たちで、指揮官を失い、統制が取れておらず、未明から当直将校を射殺して暴れ出した。この連中は町民百姓出の募兵であり、正規の武士ではない。幕府の崩壊を肌で感じ、失業することを恐れていたのである。新政府軍に屈服して路頭に迷うぐらいなら、銃にものをいわせて金穀を略奪し、野盗や山賊の類となっても戦い抜いてやろうと息巻いている。

この騒動を鎮めるため、政権を任されている勝海舟その人が現場に急行した。今日では考えられない行為だが、これが命を張った武士というものであろう。勝は暴徒と化した二大隊の兵士たちを整列させると、

「予が指令に不満あらば、予一人を銃殺せよ」と怒鳴った。

傍らで提灯を捧げ持っていた勝の小姓が頭部を撃たれて即死したが、それでも勝は微動だにしない。さすがに兵たちも恐れをなして屯所に引き返したが、後日この中の五百名ほどの兵士たちが江戸郊外へ脱走してしまった。もはや幕府陸軍は最高指揮官を失った過激な武装集団に過ぎなくなっている。

勝は脱走した連隊の指揮を歩兵頭、古屋佐久左衛門に一任し、信濃の天領二十四万石を与えることで〈衝鋒隊〉という一軍の創設を促した。また、新撰組の近藤勇にも類似的な条件で〈甲陽鎮撫隊〉を組織させ、甲府城へ派遣している。勝はこのようなやり方で抗戦

的な危険分子を江戸から遠ざけているのであった。

御三卿、田安中納言慶頼の家士で、勝の片腕でもある松濤権之丞が、陸軍士官とおぼしき若者を連れて勝の執務室にやってきた。

松濤は辺りの様子を伺いつつ、内から襖を閉めた。

「おまえさんが、成川禎三郎さんかい」と、勝は平素、江戸弁でしゃべる。

成川は少しばかり緊張した面持ちでうなずいた。

「上司を売れ、つてな野暮なこたあ言わねえ。しかし今は御家の危急だ。君恩に報いると思って教えちゃくれんか。おまえさん、福田八郎右衛門の下で働いてたってね」

「御意」

「福田の兄さん、何か戦の火種になりそうなことを申しておらなかったかえ」

「と、申しますと……」

「ヤツは小栗さんのお気に入りだ。親分ゆずりの過激な言動がなかったか、心当たりねえかねえ」

成川は心当たりがあり過ぎて、思わず苦笑してしまった。

「福田殿はしばしば、房総半島に割拠すると申しておりました」

「こいつ面白いことを考えるもんだ。もうちっとくわしく聞かしてくれねえか」

「我が国も中央集権郡県制を採用すべしと、福田殿はつねづね申しております。まずは全国に先駆けて総房三州を一つの県と成し、当該地の諸藩、天領の行政を自治政府の元に集約すべしと説いております」

「それについて、何か具体的な動きはあるかい」

「木更津の、確か島屋なる豪商と密に連絡を取り合っておるようです」

「貴重な情報に感謝するぜ。ところでおまえさん、上総の出だってね」

「山辺郡白幡村（山武市）出身です」

「おまえさん、これからはおいらの下で働いてもらうぜ。今後、房総の動きが、徳川家の

命運を左右することになる」

と、勝は自分自身にも強く言い聞かせているようであった。

成川を下がらせた後、勝は松濤をかえりみて命じた。

「次は、福田と、大鳥圭介を、ここへ」

勝にしても、松濤権之丞や、福田、大鳥にしても、皆洋学を習得し、短期間で出世した者たちである。戦国時代なら槍働きこそが出世の糸口であったが、今は何をにおいてもまず洋学なのである。

松濤は文久三年遣仏使節の随員として渡欧しているし、大鳥は村医者の出であるが、蘭学の才をかわれて旗本となり、洋学教授から歩兵頭へと昇進している。幕府陸軍の中でも、庶民から募兵された部隊を統率していたのが大鳥圭介であり、旗本や御家人からなる部隊を纏めていたのが福田八郎右衛門なのであった。

大鳥は札付きの悪党が集まったと揶揄される歩兵隊士からの信任が厚く、彼自身つねづね、

「兵は平生の取締りに困るくらいの荒武者でなければならぬ」と公言しており、前職が馬丁や博徒や火消しなど、ほとんどヤクザ崩れといった血の気の多い連中を好んで採用し、身長も五尺二寸以上と規定していた。

旗本や御家人の子弟はこれら無頼の輩と同列に扱われることを頑なに拒み、屯所も訓練も別々にしている。彼らの首領が福田である。同じ陸軍の歩兵の中で、大鳥派と福田派という棲み分けが自然となされているこの状況を、勝は見逃さなかった。

失脚した前陸軍奉行小栗忠順の直属であった福田は、当然勝に好意など抱いていない。大鳥も主戦論者であったから、和平工作に奔走中とおぼしき勝に従う気などなかった。二人とも慥然とした面持ちで現れたが、勝は何の前置きもなく唐突に、

「福田八郎右衛門を撤兵奉行に、大鳥圭介を歩兵奉行に任命致す」と声高に申し付けた。

これはすなわち、幕府陸軍における精鋭二大隊のうち、旗本と御家人によって編成され

たへ撒兵隊への総督に福田を、庶民からの募兵に洋式訓練を施したへ伝習隊への総督に大鳥を任ずる辞令でもある。この先二人とも、二千名ちかい部下を率いることになる。

「撒兵」

というこの聞き慣れないことばは、「四方に散った兵士」という意味である。フランス式訓練を受けた幕軍の戦い方は、すでに槍襖をつくるような古制の兵法を排し、近代的な散兵戦術を採用していたから、伝習隊を含めたすべての歩兵を撒兵と呼んでもかまわないはずであった。しかし、あえて幕臣組を撒兵と呼び、庶民からの募兵組を歩兵と呼ぶのは、前者が一騎駆けで戦う資格を持った名門の部隊、後者は西洋風にいうところの戦列歩兵、すなわち足軽の部隊であると線引きしたかったからであろう。

さらに両隊の大きな相違点は、伝習隊士が地べたを這い回るような練体法で訓練され、身軽な散開行動に長けているのに対し、撒兵隊を構成する番方直参は、はなから匍匐前進のようなことをする気もないので、野戦砲、火薬輸送車の護衛を任務とする軽歩兵として訓練されており、砲兵隊は撒兵隊の随伴支援をする。同じ幕府陸軍でも、身分の違いで明確な役割分担がなされていた。

「そなたらも存じておるように、慶喜公は降伏の意向を明らかにし、上野寛永寺で謹慎せられておる。謹んで君上の御憔悴を思うべし。間違っても上様に賊軍の汚名を着せるような軽はずみな振舞は致すな。わしは徳川氏の身代を保つため目下工作中であるが、その実をあげるのは、はなはだ難しと心得ておる。徳川の処分が確定するまで、我々臣僚は徹頭徹尾上様の意を体し、どこまでも恭順の姿勢を崩してはならぬ。おぬしらを一軍の将としてたるは、兵の暴発を抑えられると見込んでのことである。もしもこの先、新政府が、上様、譜代、陪臣、小使らに過酷な処置をもって臨んでくるのであれば、その時は江戸が灰燼と化しても総力を挙げて戦う心意気である。その方ら、特と肝に銘じておくがよい」

勝の眉間にすさまじい気魄が満ちている。二人は「はッ」と手を付いて平伏した。

両名が下がった後、松濤権之丞は深いため息をついて、

「あの二人、この状況で兵の暴発を抑え続けることができずかな」と険しい顔つきにな

った。

勝はそれを見て呵々と打ち笑い、

「抑えられるわけあるめえよ」

と、あっさり言った。